

〈怒り〉が忌避される時代に

——栗山雄佑著『〈怒り〉の文学化^{チクスト}』に寄せて——

友田 義行

公立図書館のO P A Cで「怒り」というキーワードを打ち込んで検索してみると、『「怒り」が消える本』『怒りよ さようなら』『「怒り」をおさめるコツ』『もうふりまわされない！怒り・イライラ』といった書籍名がずらりと表示される。〈怒り〉は慎重に制御されなければならない感情であり、適切に飼い慣らし、できれば消滅させたいと望む読者も少なからず存在するようだ。類似の書名・内容の本が繰り返し発行されていることからも、そのニーズの根強さと、解決の困難さがうかがえる。

〈怒り〉の発露はハラスマントにも結びつきやすいためか、企業のみならず大学の研修でも「アンガーマネジメント」という言葉が聞かれるようになり、〈怒り〉は六秒を過ぎると薄れゆくので、腹が立つたらまずは深呼吸せよという処世術が新たな常識のようすに語られ出している。そして、こうした文脈で語られる〈怒り〉の多くは、権力者からの抑圧や暴政に対抗する〈怒

り〉ではなく、自分よりも弱い立場の者に向けられようとする感情である。ビジネスパーソンを対象読者に想定した本では特にそうした傾向が強くなるようで、上司から部下へ、管理職から新人への〈怒り〉が問題とされる。教員から学生への対応も含まれそうだ。意のままに操れるはずの相手が思うようにならないときに抱く〈怒り〉や苛立ちをうまくコントロールするところが求められている。

だが、果たして〈怒り〉という言葉が表すのは、強者から弱者に向けられる、個人の性情に基づく心の動きで、心中に湧いては消えて完結する個人的な感情だけなのか。実はもつと集団的で継続的な情動をも含んではいないか。少なくとも、〈怒り〉を個人内の刹那的な心情に終わらせず、記憶し、伝達し、共有しようとする文化は脈々と存在してきた。しかも、権力側・多數派から長年に渡つて繰り返し有形無形の暴力を振るわれてき

たことに対する〈怒り〉を、集中的に表現せざるを得ない特定の時代・地域もあり、近代以降、特に戦後日本の沖縄は、まさにそのようなトポスであった。

栗山雄佑『怒り』の文学化は、目取真俊や又吉栄喜ら沖縄から発信を続ける作家たちのテクストに込められた〈怒り〉に著者自身も突き動かされたことが、研究の契機になつていてと推察されるが、著者はむしろ〈怒り〉の結果としての「テロル」（暴力）の発動を避けるための回路を、テクストの読解を通して模索する。〈怒り〉に共振し、感情を共有しつつも、〈怒り〉から生じる破滅を回避する道を探ろうとする、忍耐の要求される仕事である。しかしその容忍はまた、主に沖縄の人々が本土から長年押しつけられてきた状況の一部であることは言うまでもない。

〈怒り〉は時に人の心を震わせ、連帶を生み出す可能性を持つ。一方で、〈怒り〉は人を身構えさせ、遠ざけもする。大学で目取真俊らの小説を取り上げ、テクストの背景にある戦後沖縄の歴史を説明していると、引き込まれる学生と、引いていく学生がいることに気づかされる。だが、共振・共感に至らなくとも、作家や登場人物たちが抱く〈怒り〉の理由・背景を理解することは、諦めず粘り強く試み続けたい。共に怒らずにいられる距離から、他者の〈怒り〉について考察できることの特権性を恥じながら。